

開会のあいさつ

西尾 典眞（文部科学省研究開発局地震・防災研究課長）

昨日、地震調査研究推進本部地震調査委員会から全国を概観した地震動予測地図が公表された。それに合わせて、本地図を理解し、活用するための手引きとして、成果を社会に生かす部会からも報告書が出ている。

この全国を概観した地震動予測地図の作成は、地震調査研究推進本部が平成 11 年 4 月に策定した地震に関する観測・測量・調査及び研究の推進についての総合的かつ基本的な施策において、当面取り組むべき調査研究の課題として第一に掲げていたものである。この地図は、主要 98 断層帯で発生する地震や海溝型地震の長期評価、さらには、それらの地震のいくつかをモデルケース的に取りあげて、地震調査委員会がこれまで進めてきた強震動予測手法の高度化の取り組み等の成果を踏まえている。

長期評価や強震動予測手法の検討には、阪神・淡路大震災以降に整備が進んだ地震観測網から得られた観測結果や活断層調査、堆積平野等の地下構造調査の結果等が反映されている。したがって、今回の地図は地震調査研究推進本部の下で進めてきたこれまでの地震調査研究の取組を集約するものと位置づけることができる。

この地震動予測地図は、基本的には地震防災の意識啓発や地震防災対策の検討のための基礎資料として役立つものである。しかし、役割はそれだけにとどまらない。地震動予測地図では、地図そのものに加えて、地図作成の手法やデータも公開されており、それらを生かし、独自のデータを加えることで、さらに精緻な地図を作ることも可能となる。さまざまな人々が、さまざまな使い方を考え得る可能性がある。それが地震動予測地図の特色といえる。

地震動予測地図については、今後とも評価手法の検討やデータの蓄積を踏まえて、高度化が図られていくべきものであが、そこで常に意識すべきことは、どのような内容にすれば、その本来のねらいを良く果たし得るものとなるかという点である。一般国民への意識啓発ということを考えた場合、確率という概念をどう定着させて行くかということも、依然として大きな課題として残るだろう。

私どもとしては、本日のワークショップにおける議論を参考にして、今後の地震動予測地図の見直し、高度化に向けた取り組みを進めていきたいと考えている。